

学校における「LGBT」の教育—どのように伝えていくか

塩安 九十九

DVD教材「いろんな性別〜LGBTに聞いてみよう〜」が制作され3年経った。当初助成金で制作された千枚は早々と在庫がなくなり、増刷を重ね二〇一四年現在、計五千枚が全国に配布されている。文部科学省は二〇一〇年に小学校が性同一性障害と診断された児童に学校生活上の性別変更を認めたことを受け、「児童・生徒の心情に十分配慮した対応を」と全国に通知した。(※1) また、二〇一三年に行われた六〇〇〇人の教員を対象にした意識調査(※2)では、六割以上の教員がLGBTや性についての研修があれば受けたいと回答しており、LGBTに対する問題意識は高まってきている。

学校におけるLGBTの子どもの状況

テレビでLGBTが取り上げられたり、インターネットの普及によって情報を得られやすくなったとは言え、依然として学校は「性別に違和感を持たない異性愛者」を前提としており、過ごしやすい場所とは言えないだろう。

男らしくない／女らしくないことや、同性を好きになることは気持ち悪いことだという雰囲気集団生活で、LGBTの子どもたちは自分を偽らざるを得なかったり、いじめを経験する。また、学校教育は常に、異性愛者として結婚して子どもを持つことを「ふつう」として推奨するので、疎外感と将来への不安を抱かされる。さらに、多くの学校で男女別の制服があるので、自分の望む性

別の服が着れない。ゲイやレズビアン、バイセクシュアルの場合、あらゆるものが「異性が好きな前提」で話が進むので自分が存在していないような疎外感を感じる。このようにLGBTであることは、子どもにとってもストレスがかかりやすく、自己肯定感を奪われやすい。二〇一三年に行われた「LGBTの学校生活に関する実態調査」(有効回答数六〇九名)(※3)においても、いじめのハイリスク層であることが明らかになっている。

このような状況が、LGBT当事者にうつ病や精神疾患を引き起こす原因になっていたりと、自殺念慮・未遂の経験者の多さや、HIV感染のリスクが高まるような危険なセックス行動を取らざるを得ない心理的不安定さの要因とも言える。また、LGBTであるために学ぶ機会を奪われ、そのため働く機会も得にくいことはよくある。

LGBTについての早期教育の重要性

私は様々な教育現場で当事者として研修を行ってきた。小学三、四年生に話をした時の体験は忘

れられない。LGBTに対する偏見と差別心がまだ育っていないこの年代は、本当に話が伝わりやすい。今まで偏見を持っている大人向けに話をしてきたので様々な仕掛けを駆使せざるを得なかった。「そんな生徒はうちの学校にはいない」という教員には、統計データとともに「自分の存在を無視している先生に自分のことを話したいと思いませんよね」と言ったり、「LGBTへの差別感情は自由だ」という教員には、それが部落問題、民族問題でも同じことが言えるのか、そしてLGBT当事者の不登校率の高さ、いじめに合う率の高さ、自殺率の高さの統計データとともに「安全に教育を受ける権利はその生徒のセクシュアリティに関係なく、学校はそれを保証するのが責務である」ことを伝えてきた。そんな私にとって、事実だけを伝えればよい小学生向けの研修はとても新鮮だった。

子どもたちには、誰かを傷つける目的で「オカマ」や「ホモ」などの言葉を使うべきでないこと、自分らしくすることは素敵なことだから、君たちも性別は気にせず、好きなことは好きだと言って



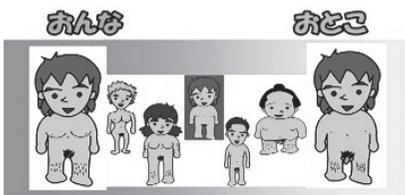


いいのだと伝えた。子どもたちは様々な性別があることを知って素直に驚き、自分もその様々な性別の中のひとりであることを喜び、今後出会うであろうLGBTの友だちのことを想像したり、自分も同性を好きになるかもしれない可能について納得した。これまでよくわからないまま言葉を使って友だちをからかっていたけど、これからは使わないと言ってくれた生徒もいた。

一方、高校生への研修はやはり様々な仕掛けが必要となる。一〇歳からの五、六年でいったい何が起こったのか？というぐらい偏見と差別心が立派に成長してしまっているのだ。上記のような経験から、なるべく早い段階から性別についてそしてLGBTの存在について知らせる必要があると思うに至った。育ってしまった偏見を取り除くより、偏見が育つ前に適切な情報を提供する方が何百倍も簡単だ。

DVD制作の経緯と過程

近年の教育現場からの研修依頼の増加は、私の有給休暇をかなり奪うことになったため、生身の



り、保護者の理解があり、学校の協力がああり、子どもたちの意欲があり、その全てがそろっていたからこそ実現できたのだ。先生方は生徒の家に説明にまわり、撮影同意書を得てくれた。保護者も快く協力してくれた。子どもたちもノリノリで撮影に挑んでくれた。編集後は何度も会議を開き、シナリオや映像の修正を繰り返した。全ての生徒・保護者・学校関係者の視聴チェックを経ての完成となった。

先生方との撮影に向けての準備や、学校・保護者とのやり取りは、学校を卒業してから随分経つ私には新鮮で、多くを教えてくれた。そして私たちのプロジェクトが子どもたちや保護者、学校関係者などにそれぞれのドラマを発生させていることが興味深く、LGBTだけでプロジェクトをするよりも、このような未知のコラボレーションの方が有形無形の広がりのある効果があることを実感した。子どもたちにとっても関係者の大人たちにとっても、私や出演したLGBTたちと関係を持つことで、テレビの話ではなく、生身の人間の問題として感じてもらえたのではないだろう

LGBTが行かずとも研修ができる映像の必要性を感じていた。また、高校生向けのDVD教材(二〇一〇年制作)への反響の中で「もっと低年齢向けが欲しい」という要望が多数あった。そのDVDを見た小学校の先生から生徒に話をしてほしいと依頼があり、何度か小学生に話をさせてもらう機会ができた。先述したように、私はその小学生の反応に手ごたえを感じ、先生とも意気投合した結果、小学生向けDVDの制作がはじまった。DVDは、ちょうど体についての学習がはじまる小学三〜四年生を対象とし、子どもたちが飽きずに見えるよう、同年代の子どもたちがLGBTの大人に質問をする特別授業と、アニメーションを組み合わせたスタイルにした。この先生方がいなければこの奇跡のDVDは存在しない。本当に感謝してもしきれない。学校関係者であれば「全国無料配布」で「LGBTというテーマ」で「一五人もの小学五年生たちが顔出して発言する」という映像作品を作ることがどれだけ困難か想像に難くないだろう。

これまでの先生方と保護者との信頼関係がある。私自身も、普段地域や学校との関わりを持たずに暮らしているため、孤立感を感じやすいけれど、地域に親しみを持ってたり、LGBTではない人にも頼ってもよさそう、という気持ちを持っている機会になった。そして、普通に暮らしていたら絶対に出会わなかったであろう人たちがこうして繋がりを持つて友だちになれたことが大きな収穫となった。この先生方との交流は今もなお続いている。

DVDの内容

このDVDは、LGBTについて知り、全ての人が自分の性別について考えることを促す作りになっている。生徒向けの三〇分の映像は、LGBTの当事者(大人六人)に一五人の小学五年生が質問するという特別授業で、小学生からの素朴な質問を中心に両者のやり取りを紹介している。小学生を対象に作ったものだが、様々な層の勉強会で活用できる仕様になっている。授業がすぐに見えるようにワークシートと教師用の指導案がウェブページからダウンロードできる。三〇分の映像



まとめ(3)

なやんだら、

1. しらべる

2. そうだんする

3. なかまをさがす

を部分的に使ったり、アニメーションだけを見せるなど、クラスの理解度に合わせて様々な授業が可能だ。また、七分の短いアニメーションも入っており、トランスジェンダーの主人公が自己紹介する内容で、人にいじめられないように、いじめる側に回っていたことを告白していたり、誰でも自分らしさを笑われると悲しいというメッセージを含むため、この作品だけで四五分の授業することも可能だ。

制作内容で注意した点は、「LGBTを理解しあげましょう」という主張にならないようにした点だ。性別の問題は全ての人の問題で、誰だってコンプレックスを持っているし、悩んだり困ったりする。特に子どもや若者は、LGBTであってもなくても、若いだけで十分大変だ。したがって、全ての人が生きるために役立つ情報で締めくくっている。悩んだり困ったら「1、調べる」「2、相談する」「3、仲間を探す」。これで大体のことはなんとかなる。私から全ての子どもたちへのエールだ。

また教員向けとして用意した三〇分の映像で愛が強調されて語られるためだ。また、このDVDを使った授業のように個人の性別ということもプライベートな話になる時は、みんなの前で自分のことを発表させることは控えた方がいい。強制的なカミングアウトになりかねない。

LGBTを中心的な題材にせずとも、生物の授業で性転換する魚や両性具有の生き物を紹介したり、古典で井原西鶴などの作品に、歴史では戦国武将の恋愛事情に触れるなど、普段の授業でできることはたくさんあるはずだ。性と生を考える会と奈良教員組合が制作した「教員のためのセクシユアルマイノリティサポートブック」は各教科でLGBTにさりげなく触れるネタをたくさん提供しているのを見たい。

教育現場の意識は変わってきている。昨年大阪で行われた「セクシユアルマイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会」では、LGBTについて小学校で教える実践をしている教員三名からの報告があり、会場は百人を超える参加者で溢れ、関心の高さが伺えた。全国大会は今年も大阪で秋に開催されるのでぜひチェックしてほしい。

は、多数のLGBTが学校で経験した苦しい出を紹介したり、当事者の統計的データの提示、また具体的などのような対応が必要なのかも参照できるものに仕上げた。ぜひ教員研修で活用してほしい。

学校教育をすすめる場合の視点や留意点

実感はないかもしれないが、一クラスに必ず一人はLGBTが存在する。教員の中にも保護者の中にもLGBTがいる。必ずその場に当事者がいることを前提にして話をしてほしい。そうした意識は、他のマイノリティ性を持つ人にとってもプラスに働くはずだ。この場には立場が違う人がたくさんいて、それが当たり前で、それが尊重される、そういった意識を持つていけば、学校がマイノリティを特別扱いせずとも、誰もが無理なく過ごせる空間になり得るのではないだろうか。誰もがなんらかのマイノリティ性を持っているのだから。

LGBTについて必ず触れてほしい教科は保健や性教育の授業だ。この教科では特に男女と異性最後に、子どもたちが脅かされることなく素の自分のままで生きること、差別や侮辱から守られること、セクシユアリティに関係なく学校で学ぶことは保障されるべき権利だ。LGBTの問題が、そして性の問題がすべての人に関わる人権問題であることが一日も早く常識として定着することを願う。

※1 「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について(通知)」

<http://rupan4th.sugoinp.com/contents.html>

※2 「子どもの、人生を変える、先生の言葉があります。教員五九七九人のLGBT意識調査レポート」

<http://health-issue.jp/>

※3 LGBTの学校生活に関する実態調査(二〇一三)結果報告書

<http://endomametacom/schoolreport.pdf>

(しおやす・つくも)

安九十九 プロフィール
ル・G・FRONT関西所属、新設Cチーム企画主宰。行政にLGBTの人権問題を提起したり、学校へ講師に行ったり、教材・映像を制作したり。性別違和感を持つ人々へのピアサポート、原稿執筆なども。現在カナダに留学中。共著『トランスがわかりません!!』『恋愛のフツウがわかりません!!』『DVD』希望の方は下記まで必要枚数と住所をご連絡ください。
ichisoug@gmail.com